

# 宝石商

小川未明

青空文庫



むかしきた北の寒い国に、珍しい宝石が、海からも、また山からもいろいろたくさんに取れました。

それは、北の国にばかりあつて、南の方の国にはなかつたのであります。南の方の暖かな国は富んでいましたから、この珍しい宝石を持つて売りにゆけば、たいそう金がもうかつたのであります。

けれど、質樸な北の方の国の人々は、そのことを知りませんでした。また、遠い南の国へゆくにしても、幾日も幾日も旅をしなければならぬ。船に乗らなければならぬし、また、車にも、馬にも乗らなければならぬ。容易のことではなかつ

たのであります。

ここに、智慧ちえのある男おとこがありました。その男は、北きたの国くにのものでもなければ、また、南みなみの国くにのものでもなかった。どこのものとも知しれなかつたのであります。

この男は、北きたの国くにへいつて、宝ほう石せきを集あつめてそれを南みなみの国くにへ持つてゆけば、たくさんかねの金かねのもうかることだけは、よく知しっていました。そのうえ、男おとこは、よく宝ほう石せきを見み分わけるだけの目めを持もっていました。

男おとこは、ひともうけしようと思おもつて、北きたの国くにへまいりました。北きたの国くには、まだよく開ひらけていいなかつたのです。高たかいけわしい山やまが重かさなりあつて、その頭あたまを青あおい空そらの下したにそろえています。また、紺こんべ

碧きの海うみは、黒くろみを含ふくんでいます。そして高たかい波なみが絶たえず岸きしに打うち寄よせているのであります。

宝ほう石せき商しょうは、今き日ようはここの港みなと、明あ日すは、かしの町まちといふうに歩あるきまわつて、その町まちの石いしや、貝かいや、金きん属ぞくなどを商あつている店みせに立たち寄よつては、珍めしい品しなが見みつかからないものかと目めをさらにして選より分わけていたのであります。

火ひの見みやぐらの立たつている町まちもありました。また、荷に馬ば車しゃがガラガラと夕ゆう暮ぐれ方がた、浜はまの方ほうへ帰かえつてゆくものにも出であいました。

男おとこは、珍めしい品しなが見みつかると、心こころの中うちでは飛とびたつほどにうれしがりでしたが、けつしてそのことを顔かお色いろには現あらわしませんでした。かえつて、口くち先さきでは、

「こんなものは、いくらもある、つまらない石じやないか。」と  
いつて、くさしたのです。

店のものは、よく知りませんが、そうかと思いましたが、め  
つたに見たことのない、珍しい美しい石だと思つていますもので  
すから、

「そんなことはありません。私どもは、長年石を探して歩い  
ていますが、こういう珍しい石はこれまで、あまり手に入れたこ  
とがないのです。」と、店のものは答えました。

すると、智慧のある宝石商は、わざと嘲笑いました。

「それは、おまえさんが、あまり世間を知らんからだ。この山を  
越えて、もつと遠い、遠い国の方までいつてみれば、こんな石は、

けつして珍めずらしくない。もつと美うつくしい石いしがいくらもあります。」「  
と、旅たびの宝ほう石せき商しょうはいいました。

店みせのものは、それはそうかもしれないと思おもいました。そして、  
赤あかい石いしや、青あおい石いしや、また海うみの底そこから取とれた緑みどり色いろの石いしや、山やま  
から取とれた紫むらさき色いろの石いしなどを安やすくその男おとこに売うってしまつたので  
す。

どこへいつても、その男おとこは、口くち先さきが上じょう手ずでありました。そ  
して、珍めずらしい石いしをたくさん集あつめました。彼かれは、それを持もつて南みなみの  
国くにへいつて高たかく売うることを考かんがえると楽たのしみでなりませんでした。  
それには、すこしでもたくさん持もつてゆくほうがもうかりますか  
ら、男おとこは、根こん気きよく寂さびしい北ほっ国こくの町まち々まちを歩あるいていました。

そのうちに秋もふけて、冬になりました。寒くなると男は、早く南の国へゆくことを急ぎました。

ある日のこと、ものすごい波の音を後方に聞きつつ 寶石商は、さびしい野原を歩いていきますと、空から雪がちらちらと降つてきました。

「雪が降ってきたな。」と思つて、男はいつしようにけんめいに路を急ぎました。けれどいつまでたつても、人家のあるところへは出ませんでした。そして、だんだんさびしくなるばかりでした。雪はだんだん地の上に積もつて、どこを見ても、ただ真っ白なばかりであります。小川も、田も、畑も雪の下にうずもれてしまつて、どこが路やら、それすら見当がつかなくなつてしまつたの

であります。

そのうちに、日が暮れかかつてきました。からすが遠いどこかの森の中で、悲しい声をたててないていました。

男は、早く町に着いて、湯に入って暖まろうなどと空想をし

ていたのでありますが、いまは、それどころでなく、まったく心

細くなつてしまいました。この分でしたら、すぐ四辺が真つ

暗になるだろう。そして、そのうちに手足は凍えて、腹は空いて、

自分は、このだれも人の通らない荒野の中で倒れて死んでしまわ

なければならぬだろうと考えました。

ちようど、そのときであります。真つ黒な雲を破つて、青くさ

えた月がちよつと顔を出しました。そして、月はいいました。

「おまえがこの北きたの国くにの宝たからをみんな南みなみに持つていつてしまおう、その罰ばちだ。海うみも、山やまも、その宝たからがほかの遠とおい国くにへゆくのを悲かなしんでいるのだ。」と、月つきがすきとおる寒さむい声こえでいったのです。

宝石商ほうせきしょうはびつくりして、空そらを仰あおぎますと、すでに月つきは真まつくろくも黒くろな雲くもの中にその顔かおを隠かくしてしまいました。

宝石商ほうせきしょうは、ほんとうにびつくりしました。自分じぶんが、なにも知らない商しょう人にんをだまして、いろいろ珍めづらしい宝ほう石せきを手てに入いれたものですから、心こころの中なかではあまりいい気持きもちちがしなかつたのです。

寒さむさは、募つるばかりでありました。そして、腹はらはだんだん空すいてきました。もはや、この荒野あらのの中なかで、のたれ死じにをするよりほ

かになかったのです。

「ああ、ほんとうに、とんだことになったもんだ。いくら金もうけになるといって、自分の命がなくなってしまうって、なんになろう。もう、みんなこの宝石はいらぬ。だれか自分を助けてくれたら、どんなにありがたいだろう。」と、宝石商は、つづくと思いました。

「神さま、どうぞ私の命を助けてください、そのかわり、持っている宝石は、一つもいりませんから、どうぞ命を助けてください。」と、彼は念じたのであります。

すると、そのとき、怖ろしい、寒い大きな風が吹いてきました。林や、森にかかった雪がふるい落とされて、一時は、目も口も開

けない有り様あさまでありました。

彼は、もう自分じぶんは、いよいよ死ぬしのだと思おもいました。そして、しばらく雪ゆきの上うえにすわって闇やみを見つめて後先あとさきのことを考かんがえました。

そのとき、彼かれは、かすかに、前方ぜんぽうにあたつて、ちらちらと燈ともしびのひらめくのをながめたのであります。いままで、がっかりとして人心地ひとごころのなかつた彼かれは勇いさんで飛とびあがりました。ああ、これこそ神かみさまのお助たすけだと思おもつて、その火影ほかげをただ一つの頼たよりに、前まえへ前まえへと歩あるき出だしたのであります。

宝石商ほうせきしょうは、やつとその燈火ともしびのさしてくるところにたどり着つきました。それはみすばらしい小舎こやでありました。中なかへ入はいつて

助けを乞こいますと、小舎こやの中なかには、おばあさんと娘むすめが二人ふたりきりで、いろりに火ひをたいて、そのそばで仕事しごとをしていたのであります。ほうせきしょう宝ほうせきしょう石商いししょうは、自分じぶんは旅たびのもので野原のはらの中なかで道みちを迷まよつて、やつとの思おもいでここまでできたのであるが、一夜やと泊とめてもらいたいと頼たのみました。

おばあさんと、娘むすめは、それはお氣きの毒どくなことだといつて、宝ほうせ石商いししょうをいたわり、火ひをどんどんとたいて凍こごえた体からだを暖あためてやり、また、おかゆなどを造つくつて食たべさしてくれました。

「私わたしどもは貧びんぼう乏ぼうで、お客きやくさまにおきせする夜具やぐもふとんもないのでございしますが、せがれが獵りようし師しなもので、今夜こんやは、どこか山やまの小舎こやで泊とまりますから、どうぞそのふとんの中なかへ入はいつてお休やすみ

くださいまし。」と、二人はしんせつに、なにからなにまで、およぶかぎり真心を尽くしてくれました。

宝石商は、このお札になにをやったらいだらうと思ひました。彼は、自分の持つてゐる宝石の一つを、この家のものに与えたなら、どんなに一家のものが幸福にならうと思ひました。また、その宝石を金にしなくても、娘のくび飾りとしたら、どんなに美しく輝いて娘の心を喜ばせるであらうと思ひました。

宝石商は、これよりほかにお札のしかたはないと考へたのです。彼は、月が空の上でいったことを思ひ出しました。

「なんにしても命が助かつたんだ。宝石の一つや二つに換へられない。」と、彼は思ひながら、床の中に入つてから、包みを出

して、おばあさんや、娘むすめに氣きづかれないうように、一つ一つほうせき宝ほうせき石せきをよ選わり分わけてながめたのです。

すると、さすがに珍めずらしい宝ほうせき石せきだけあつて、赤あか・緑みどり・青あおむらさき・紫むらさきに輝かがやいて、どれがほかのものより劣おとるということなく、見みとれずにはみいられなかつたのであります。

「南みなみの国くにへさえ持もつてゆけば、一つが幾いく百ひゃく両りょうにもなる品しな物ものばかりだ。これをやるのは惜おしい。こんなに高こう価かなものをお礼れいにする必ひつ要ようはないのだ。どうせ、今こん度どきた時じ分ぶんに、なにか持もつてきてやれば、それで義ぎ理りがすむのだ。」と、宝ほう石せき商しょうは考かんえなおしました。そして、その石いしをいみんなもとのとおり包つつんで隠かくしてしましました。

おばあさんや、娘は、宝石商が寝てしまつてから、なお起きて仕事をしています。

「明くる日はいい天気でした。宝石商は、勇んで旅立ちの支度にかかりました。」

「いろいろお世話になりました。ありがとうございます。なにかお礼をすればいいのですが、いまはなににも持ち合わせがありません。いずれまたこの地方にきましたときに、お礼をいたします。」

と、宝石商はいいました。

「なんのお礼なんかいるものですか。この道をまつすぐにおいでなされると町に出ます。道中お気をつけておゆきなさいまし。」

といつて、二人は見送つてくれました。

宝石商は、それから幾日も旅をしました。山を越え、河を渡り、あるときは船に乗り、そして、南の国を指して、旅をつげました。やつと、南の国にきて、にぎやかな金持ちのたくさんに住んでいる町を訪ねますと、どうしたことから、その町は見つけられませんでした。そして、その跡に壊れた壁や、枯れた木などが立っていました。

宝石商は、夢を見るような気持ちでした。そして、そこを通りかかった人に、この町はどうなったのかといつてたずねました。

「二年ばかり前に大地震があつて、そのとき、この町はつぶれてしまいました。」と、その人はいいました。

「どこへみんないってしまつたのですか。」と、  
 宝石商は、  
 昔の繁華な姿を目に思おもいうかべてたずねました。

「みんなちりぢりになつてしまつたのです。そのとき、死しんだ人ひともたくさんありました。また、ここからもつと南みなみの方ほうの町まちに移うつつたものもございます。」と、その人ひとはいいました。

宝石商は、がっかりしてしまいました。せつかく、この町まちの金持かねもちをあてにして、わぎわぎ遠とおく北きたの国くにからやつてきたのに、むなしく帰かえらなければならぬということは残ざん念ねんでたまりませんでした。

彼は、海かい岸がんにきて岩いわの上うえに腰こしを下おろして、ぼんやりと海うみをながめながら考かんえていたのです。

「もつと、南みなみの方ほうへいったら、また、金持かねもちの住すんでいる町まちがあるかもしれない。その町まちをたずねてゆこうか？」と、思案しあんにしてくれていたのです。

そのとき、太陽たいようは、西にしの海うみに沈しずみかかっていた。海うみの上うえが真紅まつかに燃もえています。宝ほう石せき商しょうは、また、これからの長ながい旅たびのことなどを考かんえていましたときに、不意ふいに大波おおなみがやってきました。そして、そばに置おいた宝ほう石せきの包つつみをさらってしまつたのです。

宝ほう石せき商しょうは、気きが狂くるわんばかりにあわてたのです。けれど、どうすることもできなかつたのであります。一夜やな泣なき明あかしたすえに、

「もう一度、北の国へゆこう。そして、宝石を探してこよう。」  
 と、彼は思いました。それよりほかにいい方法がなかったから  
 であります。

宝石商は、この損をきつと償うだけの宝石をもう一度、  
 北の国へいって集めてこなければならぬと決心しました。彼  
 の頭の中はそのことではいっぱいになりました。

彼は、昼も夜も、ろくろく眠らずに、宝石のことばかり考  
 えて北の国にやってきました。

北の国は雪で真っ白でありました。そして、寒い風が吹いてい  
 ました。町から、町へと歩きましたが、一度、自分の歩いた町に  
 は、もう珍しい宝石は見つかりませんでした。

すると、ほうせきしよう宝 石 商 は、いまさら、うしな失 っ た 赤・青・緑・紫の宝 石がうせき惜 しく っ て しかたがなかつたのです。よる夜も外に立たつて、そのことばかり考かんがえていました。

このとき、あお青・あか赤・みどり緑・むらさき紫の宝 石が、夜よの目めにも鮮あざやかに、凍こおつた雪ゆきの上に糸いとにつながれたまま落おちていて輝かがやいているのです。彼かれは、うれしさに胸むねがおどつて、それを拾ひろおうと駈かけ出だしました。すぐ目めの前まえに落おちていたと思おもつた宝 石ほうせきのくび飾かざりは、いくらいっても距きより離りがありました。彼かれは、血ちまなこ眼こになつて、ただそれを拾ひろおうと雪ゆきの中なかを道みちのついでついていないところもかまわずに駈かけ出だしたのでありまなした。そして、疲つかれて、目めがくらたんでついに雪ゆきの野原のほらの中なかに倒たおれてしまないました。

その夜は、いつになく空が晴れていました。さえわたった大空に、青・赤・緑・紫の星の光が、ちようど宝石のくび飾りのごとく輝いていたのであります。寒い風は、悲しい歌をうたつて雪の上を吹いて、木々のこずえは身震いをしました。永久に静かな北の国の野原には、ただ波の音が遠く聞こえてくるばかりでありました。

哀れな宝石商は、ついに凍えて死んでしまったのです。明るる朝、野のからすがその死骸を発見しました。

——一九二〇・一二作——





# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「現代」

1921（大正10）年5月

※表題は底本では、「宝石商《ほうせきしょう》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：富田倫生

2012年5月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 宝石商

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>